RIPPLE SAILING CLUB
NO.118

月刊 1992・7・28

RIPPLE

（発行） 500円
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井2−11−1
TEL 0468−57−1711

東京湾上のミスマッチ

6月の梅雨の合間のよく晴れた日である。
ゴルフスラックスの様なしっかりと折り目の付いたズボンをはき、足元は革靴の出で立ちで、耳には赤鉛筆を挟み競馬新聞をしっかりとにらみながら、そして小型の携帯ラジオからは競馬中継が流れてきていて、レース毎に何人かの男達は一喜一憂しているのである。もちろん彼らの定版であるワンカップ大関は既に足元には何本かの空き瓶が転がっているのである。
どこかの馬券売り場なら自然とその場にとけ込むのであろうが、ここは東京湾のどまん中、それもRIPPLE号のデッキの上でである。
某一部上場会社で建設会社の所長さんとか、部長さんとかが集まり年何回かの旅行の途中風景なのである。

彼らの今回の目的地は房総の勝浦でコンパニオンを呼び、黒潮でもまれた生きのよい刺身をたらふく食べてこようという企画で、ただ単に目的地まで電車で行くより、ヨットで東京湾を横断しながらそして夜にメ　のコースをという事で我がリプル号に白羽の矢が向けられたのである。

10時少し回った時刻に深浦を出航したリプル号はその建設会社の社員9名を乗せ、約4時間後に到着する勝山港を目指し、デッキ上のミスマッチを除き順調なセーリングをしているのである。
そして、彼らの持ち込んだビール、日本酒の消費量も極めて順調で、最終的にはリプル号の在庫品に成ると思っていた量は、彼らの胃の中にすんなりとおさまってしまうのである。
そこで我がリプル号の長期在庫品である、小林さんのメキシコ土産の火が付いてしまうテキーラとか、チンザノとか安物のウイスキーを差し上げると彼らの味覚にジャストミートしたらしく、極めて順調に消費されて行くのである。
リプル号の乗組員は誰も手を出さなかったのであるが、そこまで美味しいといってくれるのであるから、酒も本望であろう。

ヨットには誰も乗った事が無いと言うので心配をしていたが、酒と競馬で船酔どころではないらしい。しかし、観音を越え浦賀水道航路を併走する当りになると、若干一名が船酔ではなく酒に酔いだし艇長の小林とクルーのS氏ははらはらどきどきの場面が何度か展開されて行くのである。

リプル号は南の風をいっぱいに受け心地よいセーリングの真っ最中である。デッキ上は”いいなー！”とか”最高！”とかの感激につつまれ裸足になるものもいたり、上半身裸になったりの思い思いの姿でセーリングを満喫しているようだ。そして、リプル号が風の力だけで帆走していることが不思議に見えるのか、”これは本当に風の力だけで動いているのか？”と何度も質問が飛んで来た。
充分なアルコールと充分な感激を心に焼付け、定刻道理に目的地である勝山港に到着する頃には若干一名の酔っぱらい氏の足元は完璧に千鳥足になっていたのである。
落水の事故もなく勝山の岸壁に横付けされたリプル号のもやいを、艇長小林とクルーのS氏でいつものように手慣れた様子でもやっているときである、”バッシャーン！！”と彼の酔っぱらい氏が見事にバウ側で足を滑らし落水してしまったのである。
デッキ上に拾い上げ何人かで抱えるように更に桟橋に上げ、やれやれ困ったもんだとみんなで言っていたその直後、今度は桟橋から”バッシャーン！！”とやってしまうのである。

そして、上陸後は近くの小意気な料理屋で昼食と成ったのであるが、彼の酔っぱらいはそこでもビールを他の人と同じくらい飲み続け、ただただ呆れる光景が繰り広げられたのである。
でも、後で聞いた話によると勝浦の旅館に到着して、しばらくすると具合いが悪くなり一晩中病院で点滴を打たれていたとの事である。

大島 クルージング

恒例になりました大島クルージングが去る7／23−25に行われました。
出航当日深夜の1時近くには参加者9名が既に揃い、後一人の小原氏を待つのみの状態でこれから行われるクルージングの話でデッキ上は盛り上がっていた。

しかし、出航時刻の2時になっても姿は見えず、2時30分になっても状況は同じで、電車で来るとの事なので最終電車の通過時刻から加えること、タクシー待ち、買物等の時間を考えてもこれは急用の仕事が入ったのか、寝過ごしたかで参加は出来ないことを判断して、やむなく後ろ髪を引かれる思い出で2時40分もやいを解いて深浦を後にしたのである。（後で分かった事であるが日にちの行き違いで有った）

リプル号は静かに東京湾を南下して行き、そして、薄明るい海面にバウを切り削く衝撃に驚いた夜行虫が、航跡の波形と一緒にきれいと言うより薄気味悪く光々と光を放っているのである。
東京湾を出る頃にはすっかり当りは明るくなり、高曇りの南の風4m／sとまずまずのコンディションである。しかし梅雨明け10日ということであるが、視界が悪く、またうねりがかなり有り、時折デッキを洗うくらいのうねりに突っ込みまずまずでは有るがベストという訳には行かない航海となった。既に3人はまぐろのままベットから起き上がれない状態で、またデッキ上のクルーの何人かはスターンに行ってはげーげーを繰り返す状態であった。
午前中に釣りをする予定だった沖の山のうねりの海域を無事通過したものの、昼近くになると今度は風速が徐々に上がりだし20ノットを下らない状態になってしまった。海面はみるみる白くなりだし天気予報の言っていた、いつもの梅雨明け10日とは訳が違うというのが現実になってしまった。
更に悪いことに風速は一向に衰えず13時を回る頃にはなんと今度は30ノットを割らない状態になってしまった。20ノットの海面と30ノットの海面ではかなりのハードさが有り”イヤッホー！”という感じなのだ。バウを切り削く波しぶきは平行にスターンまで飛んで来てカッパを着ているものの、全身ずぶ濡れの状態になってしまった。
かって、リプル号で40ノットを経験したことが有るが、その時は海面から1m位がしぶきで真っ白になったのを覚えているが、それから比べればへみたいな風ではあるがやはりクルージングはそこそこの風速であって欲しい。
14時頃になるともやの中から大島の北側が見えだしやっと近付いたという安心感がクルー全員にみなぎったのである。
しかしそこからはまったくの真上り。幾度となくタックを繰り返し島の南側に有る波浮港を狙うのであるが、いかんせん上りが悪い。日没までにはと思い、最後はエンジンに無理をさせないようにヒールをさせないで機帆走で目的地に入港したのである。時刻16時45分。14時間の長旅であった。

開けて24日は三原山を見学する者、海水浴をする者、岡田港まで見学に行く者、思い思いの一日を過ごしたのである。

そして25日6時に朝食をとり一路深浦を目指し、とんでもなくガスった相模灘を北上するリプル号であった。

アルバイト 紹介

今年度のアルバイトは昨年に引続き、熱血山田君と軟弱ヘリハン男の遠山君の2人体制で行います。
暇なときはヨットで海に出させようと思っておりますので、ご指導宜しくお願い致します。
また山田君は約束道理1級を取ってきたので、クルーザーの方へもお願い致しますので、びしばしと鍛えて下さい。